実践事例②

東京都・私立かえつ有明中学・高校

アクティブ・ラーニングと課題解決型学習で、真のリベラルアーツを追究

2015年度、中高一貫校のかえつ有明中学・高校は、初めて高校入試を実施し、「学ぶことの楽しさ」を追究する新クラスを始動させた。合科目型の授業、アクティブ・ラーニングをベースに知的欲求を喚起する授業、論理的思考力・表現力を育てる「プロジェクト」など、特色ある教育を展開し、主体的に学ぶ生徒の育成を図っている。

「学ぶ楽しさ」を追究し多様な可能性を伸ばしたい

かえつ有明中学・高校は、東京湾に面する有明に位置する私立中高一貫校だ。中学1年生から高校1年生までの男女別学授業、論理的・批判的思考力を養う学校設定教科「サイエンス」（中学校）など、特色ある教育を展開し、例年首都圏の有力大学に多くの人材を送り出している。

長年、6年一貫教育を貫いてきた同校が、2015年度に初めて高校入試を実施したのは、大学入試を前提とした従来の進学校の常識にとらわれず、リベラルアーツ教育を追究するためだ。石川一郎校長は、「現在、地球規模で起きている問題は、従来の枠組みでは解決できないものばかりです。そこで必要になるのは、知識をひけらかす教養主義ではなく、『普遍性を志向する態度』ではないでしょうか。それこそが真の教養であり、価値観の違う人とも通じ合えるプラットフォームを形成していくことにつながるのです」と語る。

育成したい人材像は設定していない。それは、石川校長の次のような考えに基づく。

「ゴールを定めてそこに向かっていくという逆算的な考え方は、教育の柔軟性を失わせ、かえって生徒の可能性を狭めてしまうことになるのではないでしょうか。特定の価値観に基づいて目標を定め、みんなでそこに向かっていくのではなく、生徒それぞれが個性を発揮しながら、様々な方向に可能性を広げていける環境を用意することが、多様性を育むという意味でも大切だと考えています」（石川校長）

協働学習は生徒が互いに認め合うところから始まる

新クラスの立ち上げは、授業を受け持つ10人の教師が集まり、教育のコンセプトを固めるところから始まった。新クラスリーダーの福冨高彦先生は次のように振り返る。

「既成概念を取り払い、『学びの本質とは何か』『現在の教育の課題は何か』というところから徹底的に話し合いました。そこで共有されたのは、知的欲求を喚起する授業を目指すことです。大学入試に有効か否かという考えはいったん横に置き、何よりも生徒が学ぶことを楽しいと思える授業を、生徒と教師が一緒につくり上げていく。その結果、生徒が更に深く学びを追究するために、国内・

かえつ有明中学・高校校長
石川一郎 いしかわ・いちろう
教職歴32年。同校に赴任して10年目。「学校は生徒一人ひとりが『未知』と出会う場」

かえつ有明中学・高校
福富高彦 ふくとみ・たかひこ
教職歴20年。同校に赴任して5年目。「教科書や教師を疑ってかかるくらいクリティカルに考えられる生徒を育む」

かえつ有明中学・高校
佐野和之 さの・かずゆき
教職歴21年。同校に赴任して2年目。教育統括部長。「存在そのものが尊く、僕らはそれに寄り添うだけ」

かえつ有明中学・高校
金井達亮 かない・たつあき
教職歴13年。同校に赴任して2年目。「今、この瞬間を生きる。その積み重ねが真の自分をつくっていく」

東京都・私立かえつ有明中学・高校

◎嘉悦孝により日本初の女子商業学校「私立女子商業学校」として創立。大学生や大学院生のチューターが学習を支援する「学習支援センター」、図書・情報の拠点である「ドルフィン」など、独自の学習支援体制を展開している。
◎設立　1903（明治36）年
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約160人
◎2015年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、千葉大、東京大、東京海洋大、東京工業大、首都大学東京などに9人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、東京理科大、明治大、立教大、早稲田大、立命館大、同志社大などに延べ442人が合格。
◎URL　http://www.ariake.kaetsu.ac.jp

海外の大学を目指すというイメージを、教師間で共有しました」

そうしたコンセプトの下、高校入試に合格した外部進学生16人と、内部試験と面接に合格した内部進学生8人による新クラスが、15年4月にスタートした。

新クラスで行う教育の最大の特徴は、アクティブ・ラーニングを中心に据えた合科目型の授業だ。まずは、協働して授業に取り組む素地を学級内につくるために、生徒同士の関係性を深めるところから始めた。発声のトレーナーを招いて地声を出し合うエクササイズを行ったり、自分の人となりを学級内で共有したりする活動を通して、生徒同士が認め合う雰囲気を醸成していった。地歴・公民科担当の金井達亮（かないたつあき）先生は、その目的について次のように説明する。

「表面的に意見を述べ合うだけでは、質の高いものは生まれません。安心・安全の場をつくり、本当の自分を出せる関係性を築くことで、生徒一人ひとりの持ち味を発掘できると考えました」

日本史と世界史の合科目型の授業で複合的視座を養う

地歴・公民、理科を例に、授業の様子を見ていく。

地歴・公民は、世界史・日本史の合科目として展開する。1学期前半は、5月実施のイギリス・ケンブリッジ研修に関連し、幕末にイギリスに留学した伊藤博文ら5人の長州志士をテーマとした。授業は反転学習の手法を用いる。生徒は事前に教科書を読み、時代のアウトラインを把握。授業では、教師が更に深い内容や教科書には掲載のない情報を解説したり、グループ活動を行ったりする。

グループ分けは生徒同士の話し合いで決める。生徒それぞれが興味があること、深めたいテーマをA3用紙に書き、それを手に教室を移動し、似たようなテーマの生徒とグループをつくる。その後、グループごとに「5人はどういう人物だったのか」「当時のイギリスの様子」などのテーマを設定して協働で調べ学習を行い、調べて分かったことや気付きを発表し、全員で共有した。

1学期後半は近代の帝国主義について学んだ。世界史の視点から帝国主義や諸国間の関係などを概観し、それらと日本のかかわりを、日本史の立場から補足していった。

1学期の期末考査は「帝国主義のプロパガンダ・ポスターを作りなさい」の1問のみ。設定は第1次世界大戦前の1870年～1910年で、日・米・英・仏・独・露から1か国を選び、労働者に向けたポスターを製作するというものだ。解答時間は60分で、解答用紙の右にポスター、左にその意図を文章で説明させた。「単に帝国主義について説明するのではなく、時代背景、各国の政府の方針、労働者の立場など、様々な角度から帝国主義を捉えることで、複合的に物事を考える視点を身に付けてほしいと思いました」と金井先生は出題の狙いを語る。

クリティカルにロジカルに考える力を育成

理科は物理・化学・生物・地学の

合科目「理科総合」として展開し、自然科学の学び方を学ぶ。

1年生の1学期はまず科学哲学を学ぶ。与えられた問いをグループで話し合うが、生徒が出した答えに、教師は問いで返す。「生徒は思考を余儀なくされ、当たり前と思っていたことに疑問を持ち始めます。そして、次第に考える楽しさに気付いていきます」と福冨先生は話す。最後に学んだことを意見文にまとめる。これはルーブリックで評価するが、生徒もその内容を理解しており、自己評価できることを目標としている。

別の授業では、気球の設計を目標に気球について学んだ。反転学習の手法を用いて、気球の原理を理解するために必要な調べ学習を課してから授業を行った。「定義や用語が分かっても、気球の原理を理解するのは難しく、知識を与えられることがいかに簡単かを生徒は実感します。予習の効果もあり、授業では、知識を使いこなす真の意味を生徒は理解していきます」と福冨先生は話す。

期末考査は教科書、ノートなどの持ち込みを可とし、思考にスポットを当てた出題とした。

2学期以降は、宇宙の誕生、地球の誕生、生命の進化について、科目にこだわらず展開する予定だ。

「プロジェクト」で生徒自身が評価のためのルーブリックを作成

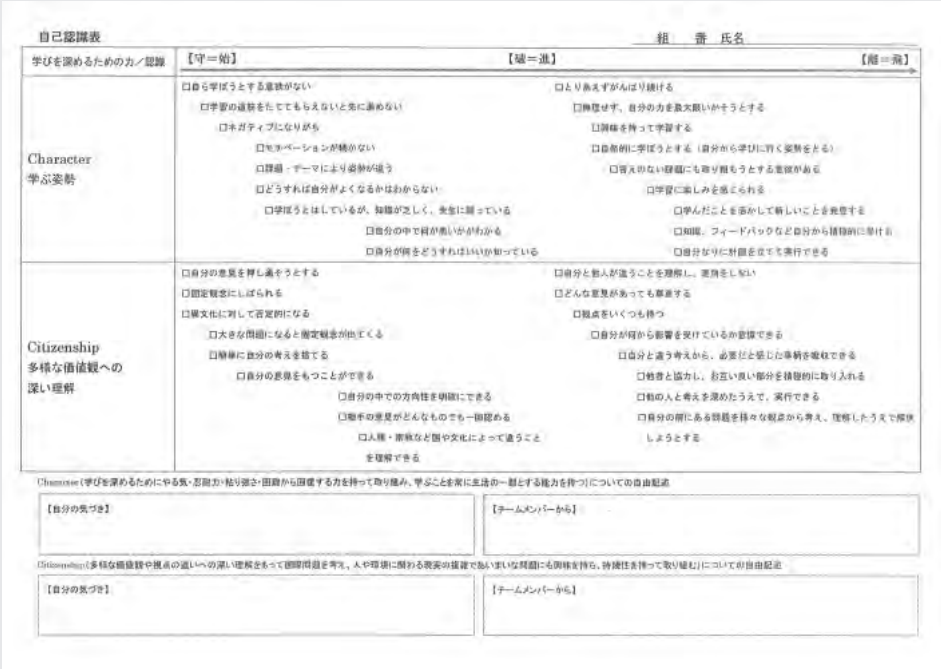
教科・科目横断的な課題に取り組みながら論理的思考力や表現力を鍛える科目が、「総合的な学習の時間」に相当する「プロジェクト」だ。情報の収集・整理・分析・伝達のサイクルを通して、情報を自分なりに理解し、その内容を自分の言葉で相手に伝える能力を育むことが狙いだ。

授業はワークショップ形式で行う。1学期の前半は文具メーカーと協力し、新しい消しゴム作りに取り組んだ。まず、消しゴムを使用する様子を徹底的に観察し、どういう場面で、どのような使い方をしているのかを分析。その結果を生徒間で共有してから、消しゴムを切ったりつなげたりして、より使いやすい消しゴムを考案して発表し合い、最後に気付いたことや学んだことを、生徒同士で振り返った。

評価は、ルーブリックに基づいて行う（**図**）。1学期は「キャラクター」（学ぶ姿勢）、「シチズンシップ」（多様な価値観への深い理解）の2つを設定し、それぞれがどういう状態にあるのかを自己評価する。

当初は、3段階で評価する「自己評価表」を用いていたが、途中、生徒の意見を取り入れて評価方法を変更した。教育統括部長の佐野和之先生は、「授業を進める中で、徐々に生徒たちが評価軸に違和感を訴え始

図　「プロジェクト」用ルーブリック



生徒が作ったルーブリック。名称も、自身の状態を確認するのが目的である以上、評価という言葉はそぐわないという理由で、「自己評価表」から「自己認識表」に改められた。　＊学校資料をそのまま掲載

めたのがきっかけです。それなら生徒が納得できるものにした方がよいと考え、ルーブリックの作り替えに参加する生徒を募りました」という。

その呼び掛けに7人の生徒が名乗りを上げ、放課後に集まって話し合い、他の生徒にもアンケートを取って、自分たちの実感に合ったルーブリックを作成した。段階評価はやめ、各項目にチェックを入れる形とし、自分の気付きや他者評価を自由記述欄に記入することにした。

「私たちが大切にしているのは、今この瞬間を大事にすることです。何が起こるか分からないという意識を持ち続けながら、生徒が自分たちで動き出せる場を用意し、教師はファシリテーターに徹する。瞬間ごとに湧き起こる生徒の意欲や衝動を受け止めることが、生徒の可能性を広げることにつながると期待しています」（佐野先生）

スパイラルに学ぶ英国研修で大きく成長した生徒たち

入学後間もない5月下旬～6月上旬には、ケンブリッジ研修が行われた。入学オリエンテーションという位置付けだが、課題探究の要素とコミュニケーション能力の向上を併せ持つ、密度の高い研修であり、その経験は生徒を飛躍的に成長させた。

研修の2週間、生徒は一般家庭にホームステイし、各種の研修やアクティビティに取り組む。1日の流れは次の通りだ。まず、午前は現地にある同校の研修所で3時間の授業を受ける。最初の2時間は、現地の英会話学校の教師から午後のアクティビティに関するテーマについて英語で学び、3時間目は、日本で準備した英語のプレゼンテーションを行う。午後はケンブリッジ散策やパンティング体験（＊）などのアクティビティに取り組む。例えば、飲料メーカーの工場を見学した日は、午前の1・2時間目に工場や商品の販売戦略などについて学び、午後は現地でグループごとに新製品を考案し、プレゼンテーションを行った。

午後にアクティビティをした後、ホームステイ先の家族にその日学んだことを伝え、当日の体験を日記に記す。翌日の授業では前日を振り返ってから、次の課題に入る。そのように、話し合いなどでテーマへの理解を深める場面、体験する場面、振り返る場面がスパイラル状につながっていくことで、自分の成長や気付きを意識化させていくのである。

この研修が初めての海外旅行という生徒もいるが、全員、ホームステイ先から研修所まで自分でバスに乗って通う。初日の開始20分程は、講師に話し掛けられても答えられず、顔を上げられない生徒もいたが、一度言葉が通じると自信を深め、みるみるコミュニケーション能力が上達していったという。「そばで見ていて、生徒が1時間ごとに進化していくのが分かりました」と石川校長は振り返る。

生徒の企画で一般クラスとの合同「プロジェクト」が実現

新クラスの立ち上げから3か月。生徒たちの成長は著しい。1学期末には自分たちの活動を他クラスの生徒にも体験してほしいという生徒たちの希望を受けて、一般クラスとの合同の「プロジェクト」を実施した。生徒が自ら、一般クラスの学級担任に掛け合い、自ら司会進行を務めて「未来の職業」をテーマにプレゼンテーションを行った。また、7月の学校説明会では、保護者や中学生に向けて新クラスでの学びをアピールし、会場から次々に投げ掛けられる質問に堂々と答えていたという。

「3か月間で生徒がこれだけ変わったのだから、私たちはもっと徹底して取り組んでいかなければならないと気持ちを新たにしました」と石川校長は意気込みを述べる。

今後の課題は、新クラスの成果を学校全体に普及させていくことだ。

「新クラスで行われているような教育が生徒に必要だと理解できても、実際に行うのは容易ではありません。このクラスでしか出来ないことを追究しながら、日々成長していく生徒の姿から私たち教師が学び、自分たちの意識改革を行っていきたいと思います」（石川校長）

＊パントという小舟に乗ってケム川を遊覧するケンブリッジ観光の目玉の1つ。